

# 中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第1360号 令和元年6月15日

## 6 月 号

神戸市のヘイトスピーチ禁止条例は「引き分け」……………本紙編集部……………	1
LGBT運動はどこが間違っているのか……………	2
アメリカの思惑どおりに動かなくなった日本……………	2
「在日社会」意識の変化を、在日制作映画に見る……………	3
映画「空母いぶき」が大ヒットした背景……………	5
あなたの地元には青年団はありますか？……………	5
<b>寄稿</b> やがて宇宙科学と宗教が結びつく日……………「兵庫通信」代表 村上 学……………	6
編集後記にかえて……………	6

本 社 〒157-0065 東京都世田谷区上祖師谷 2-5-24-103  
電話・FAX (03)5313-0215  
賛助購読料 年額 3,000円 (年10回発行)  
ホームページ <http://大日本生産党.com/>

発行所  
**中央情報通信社**  
主幹・編集長／谷田 透

# 神戸市のヘイトスピーチ禁止条例は「引き分け」

本紙編集部

現在、全国各地で制定の動きを強めているヘイトスピーチ禁止条例。

神戸市でも昨年から持ち越しで議論が続いていたが、このたび賛成者と反対者の意見が同数になるため、苦肉の策で「引き分け採択」となった。

「引き分け採択」とは、棄却や廃案ではなく、賛成者の顔を立って採択はするが、内容の根幹部分を訂正して反対者の顔を立てるものだ。言わば「換骨奪胎」と見るのが適当だ。

そもそもヘイトスピーチ禁止を、条例を制定してまでやってゆこうと言うのは行き過ぎだという声が大きかったのだが、これを新しい飯のタネにしたい勢力が強引に押し込み、根回しし、呉越同舟で賛成派を結成していた。この構図は、全国的にほぼ同じである。

神戸市の場合、市議会の日韓議員連盟に在日韓国人の団体から申し入れがあり、思慮の足りない市議たちが賛成して、条例案として議会に正式に提案されていた。

在日韓国人団体は、平均して穏健派のグループが多いのだが、北朝鮮組織から送り込まれている「国内亡命スパイ」が暗躍する。在日朝鮮人なのだが、国籍だけを韓国に切り替えるために韓国領事館で宣誓して韓国籍となり、在日民団などに潜入する。それらの「国内亡命スパイ」たちが今回のヘイトスピーチ禁止条例でも暗躍している。

日本国内で、在日韓国人と日本人が対立することを望んでいる勢力、対立が金儲けに結びつく勢力、LGBTと共に新しい被差別解放運動の突破口を開きたい勢力などが左右入り混じって賛成派を結成し、在日に信者が多い宗教団体までが参入する。こ

れで条例案は採択へ一気に傾く流れになるのだ。

だが神戸市では、この条例案に北朝鮮と極左組織がどうしても盛り込みたかった「紛争の未然抑制のための審査会」という根幹部分を排除して、それを条件に今回、条例案を採択させたのだ。

審査会というのは、外部勢力を神戸市に引き入れて、条例が守られるように監視して意見具申と審査をすることが可能なものとして位置づけられ、市長や議会の権限をある点で越えることが認められるものとされていた。これを認めれば、外部有識者という肩書で極悪非道の極左弁護士や反日反天皇の不良活動家が送り込まれることになる。



ヘイトスピーチもアンチ主義も、我々は決して賛成するどころか軽蔑するものだが、大半の日本人の正義感と良識につけこんで運動を展開しようとする悪人たちは、自分たちの主張の根拠・拠点を確保することが目的なので、相手によってカメレオンの如く説明をコロコロ変化させる。それに騙されてヘイトスピーチ禁止条例を制定してしまう議会が、いまや全国で続出する流れとなっている。

今後は神戸市の例に倣って、この条例案を換骨奪胎してから採択に回すよう努力を求めたいが、全国の地方議会には、新聞すらまともに読めない議員や、一般質問すらできない議員も山のように居り、地方の間団体から職業選択の自由を振りかざして立候補する「定数合わせ」議員らに、難しいことを説明しても馬の耳に念仏である。

なればこそ、良識ある読者の皆様の影響力で、そのような議員を逆洗脳して頂くようご協力を賜りたい。

# LGBT運動はどこが間違っているのか

最近、世界中でブームを巻き起こしているLGBTだが、これはレズ(女性同性愛)、ゲイ(男性同性愛)、バイ(男女両性愛)、トランス(性同一性障害)のことであり、純粹に脳科学の世界で病氣とされるのはトランスだけである。少数者だからという理由にならない理由で反体制運動にしているが、現実的にLGBTだから差別抑圧され不利益を被っている被害者はどれほどいるのか。

これが運動として成り立っているのは、運動の資金と後ろ盾があるからである。また、これを新たな資金源と考えて運動に参入している者も多く、少数弱者の救済とか被害者の救済とは完全に分けて考える必要がある。

LGBTは人間じゃないとか、神の教えに背く悪事だと声高に叫ぶ宗教関係者ばかりに主張の根拠を任せていてはならない。我々が個々に、LGBTに対しての見解を持つべきである。

レズやゲイは古代から記録が山のように残っている。我が国でも、平安時代にも戦国時代にも「悪いことでも恥ずかしいことでもなく」記録されている。つまり、時代的な価値観と道徳の話として、快樂とか性欲とかを語る「嗜好」の話なのである。江戸時代の役者の記録にはバイがもう一つの仕事だったとあり、金持ちの欲望が変態趣味に走らせるのは古今東西の常識だったと言える。

だが、性同一性障害は古来深刻な病氣で、少なからず記録にも残されている。このトラ

ンスは世を憚るものだったようで、当事者たちは自分を隠し通すことと、その裏返しで仕事を頑張って出世することが使命だったようだ。

今では世界が豊かで便利になり、金持ちは変態趣味を告白して同志を募り、サークルを結成することも普通になってきた。金持ちの変態なので、それを擁護し法改正運動などで働く「プロ活動家」には、相応以上の報酬が出されていた。運動を支援する活動家の中に、本当にLGBTを進めたい者は多くない。金



野党百書 野党の歴史と未来

のため、職業活動なのである。

アメリカ大阪総領事の前任者は、オバマ政権がLGBT推進を打ち出していた関係から、ホモのオヤジが着任していた。西宮にある総領事官舎にはLGBT運動を推進するよう各地の関

係者に働きかけ、デモの時には前もってアメリカ総領事館から担当警察署に電話が入り圧力が加えられた。「アメリカ政府の方針」という無言の圧力で、日本でのLGBTは市民権を得られた。そして、従来の運動が金にならなくなった同和や人権のプロ活動家たちがLGBT運動に首を突っ込み、「LGBTは少数弱者で被差別の象徴だ。価値観の多様化を認めよ」とやり出したのだ。

どこかの国で、LGBTが国民の半数を超えたら、この運動はどこへ行ってしまうことだろう。我が国のように、病的な者は全体の1%以下と言われている程度で運動しているのが平和なのかもしれない。

## アメリカの思惑どおりに動けなくなった日本

一言でアメリカと言っても内部に対立もあり、全く利権を異にする業界も多くあり、決して一枚岩ではない。それは常識なのだが、往々にして日本人は「アメリカは」という言い方で一括して話すことが多い。

まず安保に関してだが、アメリカにも日本にも「安保屋」と呼ばれる業界がある。日米安保が飯のタネという世界だが、この業界が

恐ろしいほど権力を持っている。東京のニュー山王ホテルに総本部があり、米軍極東司令官がトップを務める「日米合同委員会」なる組織が日本に対する超絶権力を有している。

ニュー山王ホテルには、彼らから渡される日米国旗がクロスしたバッジを着用しなければ日本人は門前払いされる。毎月二回の会合

には、日本官僚と米軍幹部だけでなく、バツジを着用した得体の知れない民間人も多くいる。元ヤクザとか元地上げ屋など様々な業種の者が利権のおこぼれに群がる。「M資金」の連中もここに居た。

現在のトランプ政権が安倍政権と話し合っているのは、在日米軍縮小問題なのだが、日米合同委員会の連中は真っ向からこれに反対している。自分たちの利権が縮小されるのだから当然だが。

結果的に言えば「日本は在日米軍を離さないぞ」という強固な意志を示すことで、日米安保に関連する莫大な予算を切り崩せないように作戦を進めている。いくら大統領の方針でも、アメリカは一つにまとまらない。つまり、圧力を受ける半植民地の日本は、既成事実を後追いする世論に進んで行かざるを得ないのである。



次に大麻に関してだが、終戦後にアメリカで開発された石油製品を売り込む手段として始められた大麻追放運動は、当時の占領下官僚の力で法律化され、産業用大麻（麻の繊維は非常に優秀なもので、ナイロン繊維より優れていた）も医療用大麻（麻の油は食用と医薬品に利用された）も土地改良用大麻（麻は成長が早く、しかも土地の塩分も放射能も吸収する）も禁止にした。これに付随して、宗教用大麻（神道の幣ぬさ（写真）、供え物の紐、装束）なども許可制にして規制した。

大麻イコール麻薬（マリファナ）として、大麻取締法も作られた。これも昔、村の占いごととで護摩堂などに村人が集まり、大麻の実を燃やした煙でトランス状態になっていたことをネタにしたので、地方の村の占いごととも消滅した。

## 「在日社会」意識の変化を、

最近、「二ジノキセキ（虹の軌跡）」など、朝鮮大学OBを中心とした青年商工人らが制作したドキュメンタリー映画の公開が立て続けに公開されている。物好きな筆者がこれらの作品を鑑賞して思うに、彼らの根本的な様変わりには驚くばかりである。

本作品は日本に在る朝鮮学校を軸にしたド

滅した。

しかし、大麻の麻薬成分というのはカンナビノイドという物質だけなので、それを取り除いたバイオ種子をモンサントなどの種苗会社が開発して、世界中に「大麻の効用」を積極的に推進しようとトランプ政権が音頭を取り始めている。ところが日本の官僚組織は「大麻取締り利権」を手放すのが恐ろしくて横になってしまい働かない。

我が国で大麻というものが神道と切り離せないのは、神武天皇が淡路から鳴門に逃げていた頃に、大麻の効用を広めて住民を豊かにして医療にも貢献し「大麻彦」と呼ばれたことに由来する。今でも新帝大嘗祭の装束が徳島県麻植郡で作られるのはその由来だ。

アメリカの巨大種苗会社は、日本の神道関係者に運動をさせようともしていないから、なお一層、日本世論は盛り上がらない。

アメリカも日本も、国内には考え方も利権も全く別の組織や団体が乱立している。政権が方向を打ち出しても、笛を吹いて太鼓を叩いても、国民世論が反応する前に「利権が危うくなる業界からの反発勢力」が嵐のように騒ぎ出す。そんな中で、力技で抑え込めば将来に禍根を残すのは目に見えている。だからアメリカも日本も、政権は国民世論にゴリ押しや無理強いをしない。

トランプ大統領も安倍首相も、口先の勢いは戦争指揮官のように勇ましいが、内実は穏健派なのである。両国内の既得権益者や利権集団が、新しい政策の中に利権を見つけて協力する体制が出来なければ、なかなか難しい状態が続きそうである。

## 在日制作映画に見た

コメント構成なのだが、従来の判で押し込んだような「不当な差別で在日がこれほど苦しんでいる」という「恨み節」から進歩し、GHQの日本統治政策が朝鮮戦争をきっかけに大きく変化し、在日を分断して悪い在日を標的にするはずの取り締まりが、在日全てを取り締まり敵視する方向になったことが元凶だ：と

捉えるようになってきた。その上で、朝鮮学校に通う子どもたちが「民族の伝統文化を忘れない教育」を受けさせてほしいと主張する。

◇ 昭和二十三年から朝鮮半島は南北に分かれて対立が激しくなった。

元々は古くて腐敗墮落した両班たちが、ロシアや日本の悪徳商人・腐敗軍人と組んで、朝鮮を食い物にし始めたことから、被差別農民たちを中心とした決起が各地で発生する。そこへ共産主義が入り込み、それを潰すために日本が乗り込んで支配地とする（日韓合邦）。この時に進んで日本人となったのが被差別農民の青年たちだった。彼らは日本国籍を取得して日本軍人となり、必死に勉強して満州の陸軍学校から日本内地の士官学校へ進み、日本陸軍幹部となって、恨み骨髄の朝鮮両班の生き残り勢力に仕返しをする。ところが日本軍が連合軍に降伏すると、彼ら新日本人たちも多くは朝鮮に戻ることを選択した。後年大統領となった朴正熙（日本名・高木正雄）は、その代表例である（写真）。



日本が半島で開発や製造の拠点としていたのは北部であり、現在の韓国側には農業以外に何も無かった。経済力に勝る北部朝鮮を支配したのはソ連であり、さらに満州から半島を全域支配しようと、中国と日本を飲み込む戦争を準備し始めた。これに対し反共という名分で、アメリカが支配地の日本を引き連れて「反共冷戦」に突入した。

昭和二十五年、いよいよ朝鮮戦争は本番に突入し、日本駐屯のアメリカ軍が総動員される。日本を警察だけに守らせるには無理があるとして、無理やりに警察予備隊という自衛隊を結成させ、日本国内でテロを起こして後方攪乱を計画する朝鮮人勢力を事前検挙するために多くの方法が使われた。これによって、日本国内で南北に分裂した朝鮮人と韓国人は「共産主義に味方するか反対するか」によって二分されることになる。

朝鮮学校はGHQから閉鎖命令が出され、それに反対する在日が各地でデモや抗議行動を行い、兵庫県では後に「阪神教育闘争」と呼ばれる暴力デモまで発生する。ソ連・北朝

鮮に操られる在日活動家と、アメリカ・韓国に操られる在日活動家が、政治に無関係な多くの在日たちを巻き込んで現在のような姿にしまった。

韓国では、初代大統領にアメリカ育ちで韓国語が不自由な李承晩が就任し、反共と反日を政策の柱にして、朝鮮伝統文化の排除を推進した。北朝鮮は逆に、工業立国と古代朝鮮を両立させる政策を進めた。

在日社会では、商売をする者は銀行口座を開かねばならないので、日本国と国交のある韓国籍に大半が流れた。北朝鮮籍に残った者はパスポートも取得されず、銀行も自分たちで資金を出し合って信用組合を作らねばならなくなった。「偽装転向」「国内亡命」などの言葉は、この頃から使われ始めた。

朝鮮学校を問題の核心だとして、我が国政府は「学校補助金は外国人学校を均等に扱うこと」としたので、今まで特別補助金や自治体特別援助金などを貰って運営していた所はお手上げ状態になった。教職員にも月給を支払えないという所が続出し、教科書も払い下げ方式になり、保護者の負担は月謝・当番・奉仕・バザー・署名などと気が遠くなるほどに増えた。もはや、朝鮮総連で役員をしている者の子ども以外は朝鮮学校に行かず、ますます朝鮮学校は斜陽化している。

ただ、民族の伝統文化を守るという大義名分は捨てがたく、一般日本人の中にも支援者がある。関西や九州では珍しくないが、全国的には朝鮮文化は身近に無いものなのだ。

◇ 話は最初に戻るが、朝鮮大学を卒業した在日四世くらいの者は、古い在日と明らかに考え方が違う。日本人の若者たちがそうであるように、在日の若者にとっては「二つの祖国」つまりダブルスタンダードで生きる社会で、息苦しく生活したくないという本心がある。

政治的な操作、プロパガンダ、扇動などを含む内容を、我々も見ただけで分別できるように訓練しておく必要性は高いと思う。これから在日制作映画「アイたちの学校」「王戦場」などが公開されるが、時間的余裕がある方は一見をお勧めする。

# 映画「空母いぶき」が大ヒットした背景

映画の話が続いて恐縮だが、久々に邦画が大ヒットしている。「空母いぶき」という漫画が原作（かわぐちかいじ）だが、制作サイドにすれば予想通りのヒットだそうだ。

あらずじは、自衛隊がヘリ空母にスキージャンプを取り付けた新型空母をお披露目する航海演習中に、中国のダミーで動いている東南アジア数カ国が作る「東亜連邦」という非法国家が、東シナ海と南シナ海を軍事占領しようとして、クリスマスイブに日本領海を大艦隊で占領し海保巡視船を拿捕・人質にする。それを救出する命令を受けた演習中の空母いぶきが、東亜連邦の先制ミサイル攻撃をかわしながら、「戦闘」を決して「戦争」に発展させないよう努力しながら二十四時間を耐えきり、経過を見定めていた国連安保理の仲裁でようやく終結するという物語である。

ストーリーの中で、中国がダミー国家群に兵器を大量に供与して「太平洋占領」を画策しているのは周知の事実だが、それを世界は黙認しているという国際政治学が働いている。その背景が「アメリカは世界の警察官としての地位を放棄し、単独覇権を放棄した」ことから世界が不安定になり、そこへ中国が悪魔の欲望を実現しようと動き始めた―かかる的確な国際政治の現状を観客にしっかりと理解させてしまうのが、この作品の見事なところである。これはまさに、わが自衛隊が憂慮しているポイントでもある。

物語では、内閣に主戦論・専守防衛論が対立する中、現場の空母艦隊では「武力を行使

するとは、例え自衛隊員が戦闘で死んでも、国民を戦争で死なせないことだ」という強固な意志で敵と戦い続ける様子や、外務省が国連を利用して二十四時間以内に介入させて決着を図ろうと工作する様子などが次々に展開される。

この映画が大ヒットしたのは、現在の日本世論が何を心配しているかをピンポイントで表わしたからである。中国共産党の欺瞞、人民解放軍の挑発、一触即発の東シナ海など、日本人が恐れていることが仮に実際に起こっても「我が国には対処できる可能性がある」と思わせてくれる安心感がある。在日米軍が自衛隊と同時に有事に当たるなどという幻想は、もはや捨てなければならぬ。



さて、ロシアが二〇一一年に発表した「クラブK」というコンテナミサイルがあるが、中国では最近「YJ18C」というコピー兵器を開発した。40サイズの貨物コンテナにミサイル四発を積んだもので、貨物船が軍艦に早変わりし、貨物岸壁がミサイル基地に早変わりする。つまり、中国の民間施設イコール軍事施設となるのだ。もう中国は絶対に信用して油断してはならない国になるのだ。トレーラーが中国の貿易会社のコンテナを摘んで国道を走っているが、それはもしかするとミサイル搬送なのかもしれないと思うと寒気がする。

このような現状に気づき始めている多くの国民は、「空母いぶき」を見て安心し感動するのである。

## あなたの地元には青年団がありますか？

昔はこの地区にもあった青年団だが、今では珍しい存在になりつつある。自治会でさえ全国的に五〇%を割り込む時代だから、青年団が無くなっても不思議はない。

青年団活動は内閣府が支援しており、世界的な青年団の国際交流も行なわれている。

東京には日本青年団協議会があり、全国に

各県ごとの青年団協議会、連合青年団などがあるが、東京都と兵庫県には存在しない。青年団活動が低調だからという理由以外に、メリットが解らないからという理由が考えられる。全国には十五万人の会員がおり、昭和二十六年から国が支援して活動を盛り立てている。地域行事の手伝いをしながら地域に溶け

込み、やがて地域の担い手に育っていくという「定住型」を志向していた時代と地域は、もう日本では古き良き過去の思い出である。個人の生活エリアが広がり、交流ネットワークも拡大し、学校、会社、各種団体に類似の活動があれば、地元の青年団活動は衰退するのは当然だろう。

青年団活動は、消防団と同様に、本来は地域に不可欠な存在である。自分の街を仲間と共に守り支えるという考えは、実はとても尊いものなのである。

自治会の組織率も低下してきたが、これは役所の補完活動とも言えるものであり、役所の補助金や応援で成り立たせようと思えば出来なくはない。しかし青年団は、地域に住む若者が集まって組織的に一体活動をやろうとしなければ成り立たない。消防団もそうだが、青年団も必然的に地元に着している若者でなければ参加することは難しい。

地域の婦人会や老人会が無くなった所も数多いと聞いているが、夫人や老人がいなくなつたのではなく、会の活動に参加する（他人のお世話をすること）嫌なのである。なぜ自分の住む町で、地域のために活動することが



嫌なのかを考えると、そこには公共心や道徳心がむしろ「迷惑がられる」という現実がある。ひと昔前は賛美され推奨されていたことが、迷惑がられたり告訴されたりするような時代に変化してきたという現実がある。

現在、多くの大学では「地域に貢献し、地域活動に参加すれば単位を与える」という方向性で、学生たちと地域を結びつけている所もあるが、あくまでも四年あるいは二年という限定的な結びつきでしかなく、地域と大学が共存共栄してゆく将来像は描きにくい。

内閣府は、日本の青年団活動を積極的にしている若者たちを中国、韓国、東南アジア諸国と親善交流させ、健全な若者たちの国際親善を図ろうとしているが、もっと目を足下に向けて「お祭り」「夜回り」「見守り」などの地域密着活動をする若者が国から褒められる社会をめざすべきではないのか。実際に中国でも韓国でも、若者が地域に貢献しないことは社会問題になっており、公共心や道徳心の欠如は目に余ると言われている。日本も同じ問題を共有しているのだから、各国の模範となるような青年団活動の見本を作り上げたいものである。

## 寄稿 やがて宇宙科学と宗教が結びつく日

「兵庫通信」代表 村上 学

先日、ブラウン大学上級研究員で「はやぶさ」共同研究員 廣井孝弘博士(写真)の講義を聴く機会があった。門外漢の私にはかなり難解な内容だったが、近い将来に起こるであろう「宇宙科学」の画期的な進歩に希望が持てた。



廣井博士は隕石や惑星の鉱物を専門に研究しておられるが、太陽系の小惑星と隕石は組成が違うという大きな問題があるという。南極に大量にある四五・五億年前の隕石は「太陽系の化石」と呼ばれるが、どこから来たのかは分からない。太陽系の誕生と同時に出来たもので、鉱物が急速

に冷やされて誕生したもののだが、放射性同位体の調査で正確な歴史は分かる。これによって宇宙を知ることが出来るのだが、「宇宙は風化する」という仮説の賛否が学会で分かれており、仮説が実証されるまで次の段階には進みづらいという。

南極が氷の大陸となったのは五千万年前なので、南極の大量の隕石はそれ以降のものだ。一三億年前にビッグバンがあり、九二億年前は水素しか存在しない初期宇宙だったものが、四五・五億年前に太陽系の誕生によって生命が生み出されたという仮説は、現在では常識的な仮説になっている。距離と速度で宇宙の年代が分かる「ハッブルの法則」により、今では多くの学者がデータを共有して確認で

きる。

そのデータ共有や共同研究に欠かせないインターネットは、ネットワークが乱立して混乱していた一九九〇年代に必要な迫られて急速に発展した。「はやぶさ」が持ち帰ったサンプルは、世界中の学者に分析されており、データはインターネットで共有されている。

なぜ地球には生命が誕生したかについては、太陽系が渦巻き銀河の天の川周縁部に存在し、縦方向に回転しているからだと言われている。同じ条件の太陽系惑星が存在すれば、当然生命は存在する可能性がある。天の川に入ると隕石が大量に降ってくるので、生命には危機的である。

また、地球にとっては月の存在が人類誕生と密接に結びついている。地球の地軸を絶妙な傾き(二三・四度)に安定させ、二十八日周期の引力で潮汐作用も起こす。月がなければ、人類は地球で生きては行けない。地軸が傾いていなければ、地球は昼夜の寒暖差が二

## 編集後記にかえて

### ■我が国で宗教が衰退してきた理由

神社界、仏教界はかなり凋落が目立つ。氏子制度の崩壊、檀家制度の崩壊は数年前から言われていたが、葬式の簡素化、共同墓地の流行、地鎮祭の省略はより一層業界を窮地に追い込んでいく。

神社も寺院も「癒し」を求める場所ではなく、パワースポットと縁起物の扱いになり、賽銭とグッズ売り上げで収入の道を求める方向になり始めている。

世の中が不安定で不況になると新興宗教が花盛りになると言われてきたが、既存の宗教が衰退する理由は、個々の事情を別にすれば余り論じられなかった。

だが、団塊の世代と呼ばれた高齢者たちが終末期を迎え始め、団塊ジュニアたちが世の中の中心になってきた現在、便利・快適の対極にあるような宗教の教えには魅力が無くなってきたのは事実だ。これは神主の側にも僧侶の側にも、同じ年代的な現象が起こっている。つまり、我が国の宗教の衰退の本質は、終戦直後に生まれた団塊の世代たちが「我が

〇〇度を越えるような死の惑星になっているかもしれない。

さて、科学と宗教は今のところ一致点はない。統一的な理論も無い。だが面白いのは、宇宙の外からダークエネルギーが入ってくるという理論が提唱されており、宇宙の外は科学の範疇ではないと言っているので「霊界」の存在が否定できなくなってきた。

霊界が高次元で実在すると仮定すれば、科学と宗教は統一理論を持つことになる。しかし現状は、霊魂がどこにあるか証明できないため、科学と宗教は統一されない。

宇宙のエネルギーはどのようなもので、どんな働きをしているか解明されれば、宗教は科学の領域となり数値や数式で語れるものとなる。

もしかすると今の宗教者が恐れているのは、科学の発展かもしれない。

我々が生きている間は、科学と宗教は対立し続けるものから進歩することはなさそうだ。

子は豊かな時代に合わせて育ててほしい」と育児した結果が、生まれ故郷も地域も平気で捨てて都会へ行き、その場しのぎの豊かさとか楽に価値観を覚える子どもになり、そしてまた自分たちに輪をかけた子どもたちを育てたのである。我が親が、真面目に神祭りや先祖祭りをしていたら、その子どもは果たして平気で生まれ故郷や地域を捨てるだろうか。

問題の根源を、戦後のGHQ体制に求めて騒ぐ連中もいるだろうが、それは本質ではない。事の本質は、自分自身が今まで宗教的な行事を大切に考え実行してこなかったツケが回ってきたという話である。もし現状を憂うならば、年配者が率先して、自分自身で模範を示すべきである。

### 地方本部活動報告

#### ■関西本部

◇四月十二日(金)

・午後六時半より、尼崎市内において「むすびの集い」勉強会。党员、有志計六名参加。資料は「日本で起こるかもしれない民族問題に関して―アイヌ・琉球・台湾」ほか。